早く、そして深く、絵本の世界を楽しんだ人の本」という言葉が書かれています。これは、『ぐるんぱのようちえん』で知られる絵本画家の堀内誠一が、瀬田への深い敬愛を込めて書いたものです。堀内はあるインタビューの中で、瀬田のことを絵本という大陸へ船出していく帆船の航海長であったと語っています。また、瀬田の一周忌に刊行された『旅の仲間 一瀬田貞二追悼文集一』では、瀬田と交流のあった人々が瀬田との思い出を記しています。

●瀬田文庫 一子どものそばにはいちばんいいものを一

1951年に、瀬田は浦和市太田窪へ転居しました。そして、平凡社退社後の1959年に、自宅で家庭文庫を開きます。毎週土曜日に開くこの文庫は、当時40~50人くらいの子どもの訪れ、多いときには80~100人ほどにもなりました。瀬田は、文庫にやってきた子どもたちのようすを、ソファに座ってにこにこしながら見ていたといいます。文庫に置く本は、瀬田が自ら選んでいました。

瀬田は妻に「子どものそばにはいちばんいいものを置かなくてはいけないんだ。子どもにはいちばんいいものを渡さなくてはいけないんだよ」と語っていたそうです。その精神は、瀬田が手がけた多くの仕事の中に今も息づいています。

引用・参考文献

- ・『子どもの本のよあけ 一瀬田貞二伝』荒木田隆子／著 福音館書店 2017年
- ・『児童文学論 一瀬田貞二子どもの本評論集一』(上・下) 瀬田貞二／著 福音館書店 2009年
- ・『子どもと本の心星瀬田貞二の世界』さいたま市立中央図書館 2009年
- ・『子どもと子どもの本に捧げた生涯』斎藤惇夫／著 キッズメイト 2002年
- ・『絵本論 一瀬田貞二子どもの本評論集一』瀬田貞二／著 1985年
- ・『旅の仲間 一瀬田貞二追悼文集一』追悼文集編集委員会／編 1980年

さいたま市ゆかりの 児童文学者

せ た てい じ
瀬田 貞二

瀬田貞二は、さいたま市ゆかりの児童文学者です。『三びきのやぎのがらがらどん』や『おだんごぱん』、『ホビットの冒険』などの作品の翻訳や、子ども向け百科事典である『児童百科事典』の編集も手がけました。その功績から、戦後日本の子どもの本の基を築いた一人と言われています。

●瀬田貞二の生涯 一自らのあらゆる能力と時間を子どもたちに一

瀬田貞二は、1916年4月26日に東京の本郷で生まれました。幼い頃に父親が亡くなり、下宿屋を営む母のもとで育ちました。兄弟は姉が三人おり、決して裕福な暮らしではありませんでしたが、幼い頃からの本好きで、小学生の頃は近くに住む友人の家に通っては夢中になって本を読みました。幼い頃に初めて出会った絵本「日本一ノ画噺」(にほんいちのえばなし)や、近所の文学青年の家で見たデュラックの『アラビアンナイト』などは、瀬田の著書の中で思い出の作品として語られています。

1938年に東京帝国大学文学部国文学科に入学した瀬田は、俳句を始め、中村草田男に師事します。俳名の「余寧金之助」(よねいきんのすけ)は、瀬田の母「余寧」(よね)と、父「金之助」の2人の名前を合わせたものですが、「余りねえ、金の助け」のしゃれから来ているという説もあります。瀬田は生涯にわたって俳句を好み、俳句で培われた簡潔な言葉による豊かな表現は、子どもの本の仕事にも発揮されたとも言われています。

当時の同級生は、瀬田について「思いやりのある寛容な性格で、自己顕示欲の少ない人であった。また、彼はユーモアがあり話し上手だった」と語っています。

1941年に25歳で東大を卒業すると、瀬田は東京府立第三中学校の夜間部

で国語の教師になります。しかし、戦争のためその生活も長くは続かず、1942年の暮れに徴兵され、29歳までの3年間、千葉県市川市にあった国府台陸軍病院で、衛生二等兵として軍務に就きます。そこには心的外傷後ストレス障害（PTSD）にかかった兵士たちが入院していましたが、瀬田は皆と俳句を詠む集まりを作り、瀬田と俳句の話をするために何度も訪ねてくる患者もいました。

1945年に終戦を迎えると、瀬田は「私は自らのあらゆる能力と時間を、子どもたちにむかって開放しなくてはならない」と決意します。そして陸軍病院で看護婦をしていた村松きくよと結婚し、戦前と同じ夜間中学の教師に戻りました。

1947年に新しく学校教育法が公布されると、アメリカの干渉による新しい教科書が制約の多い、程度の低い内容になることを予感した瀬田は、「教育は下のほうからでもできる」と考え、教師を辞めます。それからの約2年間、瀬田は国立国会図書館が移っていた赤坂離宮に通い、おもに外国の児童書を読みました。また、コンプトンの『エンサイクロペディア』や『ブリタニカ・ジュニア百科事典』といった子ども向け百科事典にも出会います。そして、学力の低下をくいとめるため、日本でも子どもの百科事典を作ろうと考えました。瀬田が目指したのは、今までの味気ない百科事典ではなく、「若い人たちが偶然めくったページに読みふけってしまうほどの、おもしろい百科事典」でした。

その頃、平凡社には、瀬田の旧制高校時代の友人である日高六郎がいました。そして平凡社でもちょうど同様の計画をしていたことから、日高の取り次ぎで話はとんとん拍子に進み、8年がかりの『児童百科事典』の編集が始まりました。ところで、瀬田が原稿のリライトを担当した「河童」の項目には、河童はいると誰もが信じたくなるような文章が書かれています。これについて、編集部員の一人が事典に載せる文章としてこれでよいのかと尋ねたところ、瀬田は「子供にとって河童が生きていなくてどうするのです」と答えたといいいます。

1957年に百科事典の仕事が終わると、瀬田は平凡社で新設した児童課の課

長になりますが、権力をきらって、間もなく平凡社を辞めます。当時の編集部では、課長会議のある曜日には、瀬田は常に突然腹痛になるという噂があったそうです。その後、瀬田は川村短期大学や青山学院女子短期大学で講師を務めますが、ここでも非常勤講師を貫き、助教授になってほしいという要請があったとたんに辞めてしまいました。

平凡社を退社後、瀬田は「自分流に子どもの本とつきあう暮らし」を始めます。1959年に浦和の自宅で家庭文庫を開き、評論の執筆や多くの子ども本の翻訳・再話・創作を手がけました。翻訳では、『三びきのやぎのらがらどん』（1965年）や『おだんごぱん』（1966年）などの絵本や、『ホビットの冒険』（1965年）や『ナルニア国ものがたり』（1966年）といったファンタジーを手がけました。

1971年の4月には、『母の友』で「落穂ひろい ー日本の子どもの文化をめぐる人びとー」の連載が始まりました。これは、日本の歴史の中で子どもを楽しませるため尽力した人々の痕跡を探したもので、古くは室町時代まで遡ります。全48回のこの連載は1975年まで続き、本として刊行するため1978年には取材旅行にも出かけましたが、実際に出版されたのは瀬田の死後、1982年になってからのことでした。

1977年、瀬田は急性肝炎を発病し、自宅で療養しながら仕事をする生活が始まりました。しかし、1979年7月11日の明け方に吐血し、大宮の日赤病院に入院します。亡くなるひと月ほど前に知人に出したハガキには「私には“落穂ひろい”という題の、室町時代以降、大正までの子どもに寄せる大人の文化的関心のあとを見つける楽しみな旅が残っています。トールキンではありませんが、“道は続くよ、どこまでも”といった感じです」と綴っていましたが、8月に入って病状が悪化し、8月21日の早朝に亡くなりました。

瀬田の絵本に関する評論をまとめた『絵本論』の初版本の帯には、「誰よりも

瀬田貞二略年譜

- 1916年 東京市本郷区湯島に生まれる。父・瀬田金之助、母・余寧
- 1928年 本郷小学校卒業
- 1934年 開成中学校卒業
- 1938年 東京高等学校文科乙類卒業
東京帝国大学文学部国文科入学
- 1939年 この頃より、本格的に俳句を創作する。中村草田男に師事
- 1941年 東京帝国大学国文学科卒業
旧制東京府立第三中学校(現在の両国高校)の夜間部、桂友中学校の教諭となる(～45年)
- 1942年 召集。市川市の国府台陸軍病院の衛生兵となる(～45年)
後に夫人となる同病院看護婦きくよ氏と出会う
- 1945年 復員。桂友中学校に復職
きくよ氏と結婚
- 1946年 中村草田男主催の俳誌「萬緑」創刊。余寧金之助の名で投句。
編集を担当
- 1949年 『児童百科事典』の企画をもって平凡社に入社。編集に携わる
- 1951年 浦和市太田窪に転居
『児童百科事典』全24巻 平凡社(1951～56年刊)
- 1953年 『地球の案内者たち』実業之日本社
- 1956年 「冒険小説 北極星文庫」全22冊 平凡社
- 1957年 平凡社退職
『オタバリの少年探偵たち』(訳) 岩波書店
- 1959年 浦和の自宅で家庭文庫をひらく
『七わのからす』(訳) 福音館書店
「新選日本児童文学」全3冊 小峰書店
- 1960年 川村学園女子短期大学 非常勤講師となる(～65年)
『子どもと文学』(石井桃子等共著) 中央公論社
『おだんごぱん』(訳) 福音館書店

- 1962年 青山学院女子短期大学 非常勤講師となる(～74年)
『あふりかのたいこ』福音館書店
- 1963年 『チムとゆうかなせんちょうさん』(訳) 福音館書店
- 1964年 リリアン・H・スミス『児童文学論』(共著) 岩波書店
- 1965年 『三びきのやぎのがらがらどん』(訳) 福音館書店
『ホビットの冒険』(訳) 福音館書店
- 1966年 『ナルニア国ものがたり』(訳) 岩波書店
- 1967年 『おおかみと七ひきのこやぎ』(訳) 福音館書店
『航路をひらいた人々』さ・え・ら書房
- 1971年 「落穂ひろいー日本の子ども文化をめぐる人びとー」連載開始
(「母の友」1971年4月号～75年3月号)
- 1972年 『指輪物語』全6冊(訳) 評論社(1972～75年刊)
『げんきなマドレーヌ』(訳) 福音館書店
- 1973年 「夢みるひとびと」連載開始(「子どもの館」1973年6月号～75年2月号)
- 1974年 『アンガスとあひる』(訳) 福音館書店
- 1975年 初めての海外旅行(欧州児童文学の旅 9月23日～10月12日)
- 1976年 『十二人の絵本作家たち』すばる書房(のちに『絵本論』福音館書店に収録)
- 1977年 『お父さんのラッパばなし』福音館書店
- 1978年 『こしおれすずめ』(再話) 福音館書店
- 1979年 『きょうはなんのひ?』福音館書店
8月 逝去
- 1982年 『落穂ひろい』福音館書店
- 1985年 『瀬田貞二子どもの本評論集 絵本論』福音館書店
- 2009年 『瀬田貞二子どもの本評論集 児童文学論』福音館書店